

万葉集卷第十六由縁歌「桜児伝説」の研究

—境界と供儀の視点から—

入谷 祐子

呼ばれて振り返るあざながそれならば、大概の人は花の姿を思い浮かべる。桜児。

「処女墓伝説」と通称される一連のおとめ自死伝説の中で、筆頭ともいうべき完成度と知名度を誇る卷第十六冒頭歌の処女である。だがこの場合、単純に花の如き容姿を言いたいのであろうか。まず「さくら」音を一考する。

「さ」は五月、早乙女、早苗と同源の穀神を示す音、「くら」は磐座の座、つまり穀神の依代であると言う説が一九七四年刊桜井満著『万葉の花』より一般的に語られてきた。実際の所、近年まで桜木は稲作における曆的存在であった。それ故豊作を占う材になり、又予祝を行う媒体となり、更に豊作を導く呪術具として、年間行事のまにまに登場したのである。農村での「種まき桜」「苗代桜」の名称、亀甲を焼いたウワズミザクラ、宮中から民間へ広がった祈りのカザシ、そして水田の取水口に挿しそえられた桜枝等が例として挙げられるであろう。

記紀が述べる、身の潔白を証し立てる為無戸殿に火を放つコノハナサクヤヒメと、謀反の兄に従って稻城の火中に身を投じたサホヒメの出産の話からも、女性と稲、そして生と死の境界である火中に誕生する新しい命には、浅から

ぬ関わりを見出す事が出来る。コノハナよりホデリノミコト（海幸彦） 天津日高日子とホオリノミコト（山幸彦） 穂穂手命が生じ、サホビメからはホムチワケ（穀童といわれる）が誕生した。山幸は海幸を屈服させ、天皇の祖となる。天皇は新嘗祭の祭主である。

さて、「さく」＋「ら」と考えた場合如何であるか。「さく」に割く、裂く、柵などをあてれば、二つに分け隔てる、境を造る等の意を窺う事が出来る。農耕の季と非農耕の季を分け隔てると考えてもよい。しかし万葉集巻第八―十四（三）歌国誉めにある「国のはたてに咲にける」詞句より、国の果て、此国と彼国の境、言うなれば境界に存在する様を忘れ去る事は出来ない。

「処女慕伝説」とは通常桜児、緞児、菟原（葦屋）娘子のことを言い、場合によっては真間の手児奈、珠名を含む。複数の異性から求婚され、白死して和平を生むおとめ達であるが、これとは別に難題を課した挙句、求めに応じず昇天する存在が連想されはしないか。日本ではカグヤヒメとよばれる異界の人である。

「竹取物語」は「羽衣伝説」が起源と言われる。中国の羽衣伝説は七夕譚、七星譚、難題求婚譚の三つに分類できるが、そのうちの難題求婚譚と人祖誕生伝説系の竹中生誕説話が複合した文芸作品と見る向きが有力である。これを足掛かりにすれば、複数の求婚者を残して、異界へ去る桜児はカグヤヒメひいては羽衣伝説と有縁と言えなくもない。ここで留意すべきは「羽衣伝説」のヒロイン達が雷神の身内に設定されていることである。人祖と言われる中国神話の伏羲・女媧両神は『文選』によれば、龍身・蛇軀であった。イザナミ・イザナギと雷神の関わりも併せて記憶しておかなければならない。

カグヤヒメ系の難題求婚譚と「竹」のつながりは中国において竹取生誕説話と幸運（期待）譚の複合型伝承に確認

される。中でも「李月娥」の話は「竹取物語」の内容と近い。「竹譜」や蘇東坡を引合いにださずとも竹はサチ（幸い）をもたらず特別な植物である。

卷十六冒頭歌詞書の中で注目すべきは、桜児が「林中」に尋ね入って「經」き死ぬ件であろう。他の処女墓伝説のおとめ達は入水を自死の手段とした。先述の通り「さくら」には豊穰への祈りが込められる。それが自ら死に向かう行為は、みかえりを期待し何かに捧げられた命を連想する。犠牲・供犠という意識がここで浮上する。記紀に登場する多くの姫神は稲に縁の名なり性格を持って、何ものかの犠牲になろうとした。ソトホシノイラツメ、サホヒメ、コノハナサクヤヒメ、クシイナダヒメ。そしてオオゲツヒメは屍から五穀を発生させた。つまり、これら女性の死は、見返りのサチ（豊穰）を期待する意図があつたと考えられる。

従って桜児の死が、稲作の豊穰を期待する一種の供犠であつたと想像することは容易い。けれどこの伝説はまだ他の思惑を内包している。

類を同じくする纏児に視点を移してみよう。桜児の誕生を解くには実は纏児こそが鍵だと考えている。入水する処女の原像は「玉」である可能性がある。催馬楽、記紀万葉で度々玉は登場し、或物は水を吐き、濯がれて神を生じ、また或物は井の底に鎮まるのをよしとした。玉は手首を取り巻き環を成す。珠名、手児奈（「て」十「こ」十「な」）は共に手に巻いた玉が原像かも知れない。水に捧げられた玉、或いは犠牲によつて治水によるサチを齎すと想像される。一方「經」の「わ・なく」が輪状のなかに首を入れ亡き存在になることから、纏児等と桜児には「輪」、つまり境界を敷いて環状の内部を守る共通の形態が存在する事に気付く。纏は「山纏」（ヒカゲノカツラ）そして「玉纏」（ピナンカツラ）と表記される。

然れば、境界にあり、輪に吊り下がり、何かを守り、サチの見返りを得る為供えられたものとは何か。それは、神事祭事において鏡や玉と共に枝に下げられた「幣」「木綿」であつたのではないか。木綿をおとめの短い命に擬えた歌が万葉集中に幾つか見られる。一五七の十市皇女卒時の挽歌や人麻呂の吉備津の采女に対する歌がそれである。桜児は枝や竿に掛けられて靡く木綿、一言では幣だと考へる。

桜児が木綿なら彼女を巡り闘つた壮士は竹柱であつた可能性がある。皇子など高貴な男性にかかる詞の一として「なゆ竹の」がある。また和泉国の地名とされているが菟原処女を争う壮士の一人は小竹田壮士と呼ばれた。竹は治水の為、勅命を以て堤に植えられたことが景行紀五十七年条に見える。柱はそもそも神の降りる代で、転じて神の数量単位になつた。天皇が現人神を名乗ることによつて皇子等も柱と由有る存在となる。

二本（柱）の竹のどちらに寄るでもなく垂下する幣。ここで思い出されるのは、今で言う所の注連繩の形態である。山中にそれが掛渡された時、山の神の世界と里の世界は二つに分け隔てられる。

陰陽五行説によれば、本気（春）を榮させる為には金気を剋する必要があつた。ゆえに中国の「禮記」や「唐月令注」は三月に金気の畜生である犬を九門で磔にしたと記事している。日本における「花咲か爺」の犬が犠牲死しサチを得て花が咲く件は、この行事が大本であろう。日本では実際の犠牲を強はず、より伝播しやすい寓話に転化してその呪を広めた。少女もまた金気の性を持つ。

五行説に頼らずとも、縄文中期から後期にかけて行われた女性形の土偶の破壊による大地新生への呪は、オオゲツヒメ、ウケモチノカミ以前に死体化生譚の意識が芽生えていたことを物語っている。大陸から流入した后稷の話を持つことなく、その思想は我國の土壤にあつたのだ。

では、桜児を幣の具象化とするならば、その供犠に何が期待されたのか。

雨は天恵で幸を生むが雷は時に落下し、内裏を焼失させたりする表裏ある祟り神である。来訪を崇める一方で落雷を防がねばならない。竹は雷が伝って降りる柱だから幣をかければ雷避け、雷封じとなる。更に竹は治水工事が盛んになった二世紀に池堤の補強用に植えられたことが景行記紀に見える。つまり、水、稻、竹、雷、幣がそろえば都の展開の基礎を支える治水と繁栄に繋がる呪が成立すると言えるだろう。桜は稲作豊穰への祈りを更に強化し、女性に比すことで賢の性格を与え、荒ぶる神をなだめた上みかえりの幸を期待した。また羽衣伝説を下敷きにすることで、暗にオトメが雷公の血縁でありながら求婚者(人間・天皇)を助けるといふ伏線が敷かれたことも見落としてはならぬだろう。

言語学で「カグ」は光の非静止的な状態をいう音である。よってカグヤヒメやカグヤマの「カグ」は稲妻と考えるのが妥当だ。ある時期、雨雷に関する祭場が三輪山上から香具山へ移った。

試みに次のような構図を示したい。

A、蛇(水)・龍(雷)・柱(神) ↓ 貴種・皇統(現人神) ∷ 壮士Ⅰ・Ⅱ

B、人草・青草(人) ↓ 人 ∷ (サチを期待した供犠) ∷ 桜児

Aの貴種グループに二人若しくはそれ以上の複数の代表者が現れると、内紛と反乱の源になる。それを鎮め封じるのがBの犠牲死だ。事後にあつては敗者側の荒ぶる魂を一所に押さえ、宮城へ祟りが及ぶことを防ぐ役目を荷った。何時の頃からか、荒ぶる魂のイメージは雷に重なる。

以上を統べて桜児伝説は単なる伝説を脱して、時代と環境、及び施政者側の意図を孕んで整えられた。境界保守及

び供儀代行を目的とする豊穰と新生の祝的文芸であったと考える。そして、その時代とは記紀編纂の頃に近いことを感じさせられるのである。

春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香具山

藤原京の東に見えたのは、木綿が多に靡く様子だったのかも知れない。